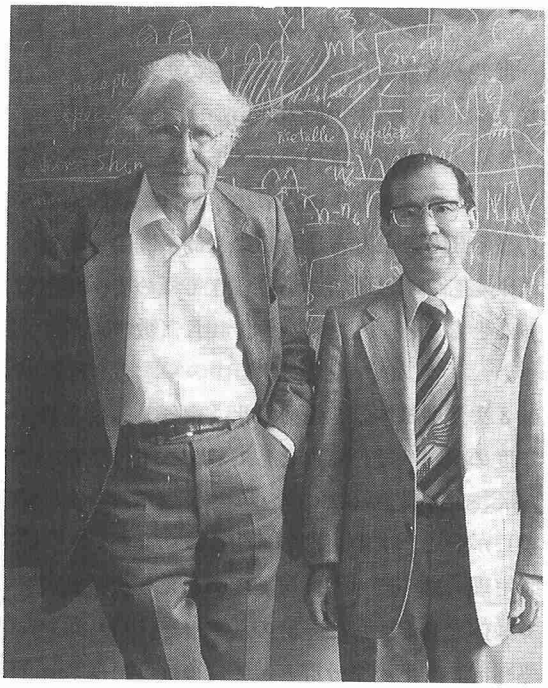
モ　ッ　ト　病

上　村　　洸（物理学教室）



（1984年７月モット先生の居室にて）

早いもので，私の学究生活も35年になり，この間，先輩知己のお世話になったことは数知れない。とりわけ英ケンブリッジ大学のサー・ネーヴィル・モット先生とのお付き合いは，今日の私にとって絶対に欠くことのできないものである。

1973年に私は，半導体に関する研究で，当時未知の先生にご意見を伺う手紙を差し上げたところ，あたかも旧知のような筆致で親切丁重な回答を下さった。これがきっかけとなって，先生のお招きにより翌74年10月から約１年にわたりケンブリッジ大学キャベンディッシュ研究所の客員所員として，日本人として初めてモット先生と膝を突き合わせて研究をともにする光栄に浴した。

先生は半導体の研究で1977年にノーベル物理学賞を受けられた碩学で，戦後間もない時期に学生の指針になったのは先生の著作であり，私どもにとって神様のような存在であった。

こんな偉大な先生であるのに少しも堅苦しいところはなく，毎日お茶を共にしながら研究について語り合い，私の家族がケンブリッジでの生活を楽しめるように心を配ってくださったりもした。

その後，機会ある毎に先生にお目に掛かるよう心がけているが，昨年は助教授の青木秀夫さんとの共著を出版した際，序文を快くお引き受け下さった上で，種々のアドバイスを頂いたことは無上の光栄と感謝に耐えない。

このように私の先生に対する尊敬の念は年毎に募る一方だが，こうした気持ちは先生にお会いした人々に共通のようで，慶応大学理工学部教授の米沢富美子さんは，これを「モット病」と名付けている。まさにこの「モット病」患者は世界中に枚挙にいとまがない。

今夏，ケンブリッジで開催された高温超伝導の国際会議にモット先生に招かれて出席し，久々に先生とホットな話し合いをした。85歳になられてなお現在の物理学の最も大きなトピックに旺盛な好奇心を持ち，この問題を解きあかしたいというバイタリティーに頭の下がる思いがした。

（1990年（平成２年）10月18日（木）発行，日本経済新聞第14版「交遊抄」から転載しました。）